

【概要書】

中世における『源氏物語』古注釈の研究

カラーヌワット・タリン

はじめに

中世における『源氏物語』古注釈の研究には、まだ解明されていないことが多くあるので、本論文ではこの研究に関わる様々な課題を考察する。

中世の『源氏物語』古注釈を研究するにあたっては、現存している資料が少ないという問題がある。また、資料が現存していても、編者、成立年代、作成の目的などが不明なものも多く、伝本も一本か二本しか存在しない場合がある。そのため注記の内容を比較・検討することが困難であったり、諸本の系統などについて論じることができなかつたりすることが多い。例えば、『水原抄』のような大部な古注釈の場合は、『源氏物語』に関わる人々の間で広く知られていたが、早い時期に散逸してしまったので、他本に引用された逸文によって研究することしかできない。

しかしながら、このような研究の状況であっても、中世の『源氏物語』古注釈の中には、まだ調査が不十分な本がある。これらの本の精密な調査にもとづき、新しい情報を発見することによって、この領域の研究は進歩していくと考えている。従って、本論文は『葵巻古注』、三冊本『紫明抄』、東山御文庫蔵『七毫源氏』、九曜文庫本『源氏物語抄』を扱うことにした。

第一部 『葵巻古注』の研究

第一章 『葵巻古注』の注記

——鎌倉時代の『源氏物語』古注釈との比較から——

第一部では、『葵巻古注』を中心に考察する。『葵巻古注』は発見された当初から散逸した鎌倉時代の古注釈『水原抄』ではないかと言われたが、意見が様々で、未だ定説に至っていない。第一章では、『葵巻古注』の注記の特徴について考察した。まず第二節で、巻

子本の『葵巻古注』はどのような資料なのかを説明し、続いて第三節で『葵巻古注』の先行研究についてまとめた。『葵巻古注』を発見した池田亀鑑氏は、この本を『水原抄』とみなしたが、重松信弘氏は池田論を否定した。その後、寺本直彦氏、および田坂憲二氏が『葵巻古注』は『水原抄』である可能性が高いことを論じている。しかし、稿者にはこれらの論にまだ疑問があると考ええる。第四節では、同時代成立の『光源氏物語抄』、および『紫明抄』と比較し、『葵巻古注』の注記の示し方の特異性をとらえた。それは、物語本文をすべて載せた上で、本文を読みながら解釈内容をすぐ確認できるように、注記を本文の行間、あるいは裏面に記すという体裁であった。第五節では、『葵巻古注』の本文区分に関する注記の充実にについて考察し、『葵巻古注』の本文区分は、A、会話文、B、消息文、C、心中の言葉、そしてD、本文の内容に即した区分の四種類にわけられることなどをとらえた。

第二章 『葵巻古注』と『水原抄』の関係

——鎌倉時代の『源氏物語』古注釈の利用——

第二章では、『葵巻古注』に関する最も大事な問題について考察した。それは『葵巻古注』と『水原抄』との関係である。先述したように、この問題は『葵巻古注』が発見された当初から議論になったが、未だ定説には到達していない。まず、第二節では、池田亀鑑氏の論文の問題点を取り上げた。それは、『水原抄』が『葵巻古注』のように卷子本だったとは到底考えにくいという点、『水原抄』の逸文にしばしばみられるタイプの注記が『葵巻古注』に一切みられない点、そして『葵巻古注』に『源氏物語』の全文が掲載されているという点である。次に、池田氏が『水原抄』の逸文から推察した『水原抄』の性質が『源氏物語』に合わないことを指摘した。さらに、『葵巻古注』の注釈の中に引用された『源氏物語』本文に異同がみられるという問題もある。これらを合わせて考えてみると、『葵巻古注』が『水原抄』そのものであるとは考えにくいのである。最後に、第三節では『葵巻古注』の利用者について、誰か高い地位の人物に献上するために作られたのではないかと推測した。

第二部 内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の研究

第三章 内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の独自性

第二部では、内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』について考察する。『紫明抄』は伝本が複数あるが、完本は京大本『紫明抄』とこの三冊本『紫明抄』しかない。にもかかわらず、三冊本『紫明抄』の先行研究は、これを部分的にしか検討してこなかった。また、三冊本『紫明抄』第三冊の末尾には、他の『紫明抄』の伝本に全くみられない素寂の書状が添えられており、この書状だけが『紫明抄』の成立過程を伝えてくれる点も重要である。つまり、三冊本の祖本は素寂自身の近辺からしか出てこない情報を含む本だといえるのである。第三章では、三冊本『紫明抄』の独自性について考察した。

まず第二節では、三冊本『紫明抄』の先行研究についてまとめた。田坂憲二氏は、三冊本『紫明抄』が『光源氏物語抄』より先行すると推測した。一方、岩坪健氏は他の注釈書からの内容が追加された三撰本『紫明抄』が完成したのちに、その三撰本から抄出されたものとする。

第三節では、三冊本『紫明抄』の特徴を次のようにまとめた。

A、引用された『源氏物語』の本文の長さが『紫明抄』他本と異なること

B、編者の作成途上のコメントがあること

C、『紫明抄』他本にはみられない『水原抄』と「親行本」の異本注記があること

第四節～第七節では、三冊本『紫明抄』にみえる『水原抄』、『光源氏物語抄』、『河海抄』、『花鳥余情』の説と似たような内容について個々に検討した。その結果、『光源氏物語抄』と『紫明抄』他本の間には三冊本の祖本の成立時期が想定されるべきだと考えられた。さらに、三冊本『紫明抄』は分量が少ないが、独自の注釈内容が多くある点が重要であることも指摘した。

第四章 内閣文庫蔵三冊本『紫明抄』の位置

——『光源氏物語抄』および『紫明抄』諸本との関係を中心に——

第四章では三冊本『紫明抄』の位置を中心に考察した。第二節では、三冊本『紫明抄』と『光源氏物語抄』、そして『紫明抄』の一致する内容の割合について検討し、三冊本『紫

明抄』には『光源氏物語抄』の独自の注釈と一致するものが非常に少ないながら存在することを確認した。これは、他の『紫明抄』にみえないので、三冊本『紫明抄』の位置にとって大変重要な情報である。第三節では、三冊本『紫明抄』と『光源氏物語抄』の一致している内容を考察した。これらの内容があるからこそ、三冊本は現存している『紫明抄』諸本のいずれかを転写したものではないことが明らかである。そして、第四節では、三冊本『紫明抄』の位置をまとめた。三冊本『紫明抄』には散逸した「水原抄」の記載があり、その祖本はかなり古いと推察される。さらに、三冊本には本文だけがあげられ、注記のない空の項目がいくつかみられる。しかも、注記があっても「未勘」、「可尋」、「他本見可」、「前勘」、「後勘」など、作成途中であることを示すことわりが多数みられる。これらの点から、三冊本は他の『紫明抄』に先行する注釈、つまり草稿段階のものと見られるということ提案した。

第三部 東山御文庫蔵『七毫源氏』の研究

第五章 東山御文庫蔵『七毫源氏』の特徴

第三部では、東山御文庫蔵『七毫源氏』を中心に考察した。『七毫源氏』は従来、源氏の古写本として扱われており、影印も刊行されておらず、研究があまり進んでいない。しかし、当該本に記されている注釈は現存している古注釈のいずれにも一致しない内容もある。中世における『源氏物語』古注釈の研究にとって、とても重要な資料の一つである。第五章では、まず『七毫源氏』の情報についてまとめる。

第二節では『七毫源氏』の基本的な情報を理した。次いで、第三節では『七毫源氏』の基本的な構造をとえら、『七毫源氏』の本来の姿が最も残されているのは「葵」巻であることを指摘した。次に第四節では『七毫源氏』の本文中にある注釈の種類について考察し、『花鳥余情』以降の注がみられないこと、さらに、散逸した『正和集』や『水原抄』の逸文から考えて、『七毫源氏』の『源氏物語』本文書写後、比較的早い段階で注記が書き込まれたものと推測した。

そして、第五節では『七毫源氏』の巻頭にある作中和歌と巻末に耕雲の和歌を列挙した。最後に、第六節では、『七毫源氏』の伝称筆者と鑑定について考察した。『七毫源氏』は近世頃に鑑定されただろうと論じた。

第六章 東山御文庫蔵『七毫源氏』と鎌倉時代の『源氏物語』古注釈

第六章では『七毫源氏』と鎌倉時代の『源氏物語』古注釈の関係について考察した。『七毫源氏』には中世のさまざまな『源氏物語』古注釈から引用されたとおぼしい注記がある。まず、第二節では、『七毫源氏』の中で注釈書名が付された注記について確認した。確認ができた古注釈書名は『源氏釈』、『奥入』、『水原抄』、『河海抄』である。但し、注釈書名が示されていないものの、『光源氏物語抄』、『紫明抄』、『仙源抄』、『原中最秘抄』を利用、参看した可能性もあるということを第三節で検討した。次の第四節では『七毫源氏』の独自の内容と、散逸した『水原抄』の逸文とを比較した。その結果、『七毫源氏』の独自の注釈に『水原抄』の逸文が含まれている可能性が考えられる例があることを述べた。最後に、第五節では『七毫源氏』の中で、鎌倉時代の人物名が付された独自の注記について検討した。その中でも清原教隆の名を付した注記は、『光源氏物語抄』の祖本、あるいはその成立期の別の注釈書の存在の可能性などをうかがわせる、貴重な情報を提供している。このように『七毫源氏』は鎌倉時代の『源氏物語』古注釈に関するさまざまな情報を提供してくれる資料である。この貴重な本の注釈史上の価値について明らかにしつつ、鎌倉時代から長らく埋もれて続けてきた注記の一端などを掘り起こしてみた。

第七章 東山御文庫蔵『七毫源氏』と『光源氏物語抄』

第七章では『七毫源氏』と『光源氏物語抄』との関係について考察した。まず第二節では、先行研究についてまとめ、続いて、第三節では、『七毫源氏』と『光源氏物語抄』の一致している内容の例を取り上げ、『七毫源氏』の注釈者が『紫明抄』より『光源氏物語抄』のほうを重視していたことをとらえた。また第四節では、『七毫源氏』で『光源氏物語抄』の構成をそのまま残している項目について確認した。

右の検討から、『七毫源氏』の注釈者は中世の主要な古注釈書を所持ないしは閲覧することが可能な環境におり、『源氏物語』に対する知識も深いと考えられる。また、『光源氏物語抄』に関する『七毫源氏』の引用のあり方から、現存『光源氏物語抄』の本文がある程度古態を残すことが示唆された。さらに、『七毫源氏』の注釈の構成は『光源氏物語抄』とおおよそ一致しているので、それらの注釈はそのまま『光源氏物語抄』から引用したと考えられた。

第四部 九曜文庫本『源氏物語抄』の研究

第八章 九曜文庫本『源氏物語抄』の特徴

最後に、第四部では、九曜文庫本『源氏物語抄』について考察した。九曜文庫本『源氏物語抄』は他の伝本が存在しない上に、編者、利用者、書写年代も不明であるが、当該本にはさまざまな興味深い点がある。まず、第二節では『源氏物語抄』という注釈の基本的な情報についてまとめた。当該本の横本という形態と朱の記号の使い方から推定すると、編者は連歌師と何らかの関係がある可能性が考えられた。続いて第三節では、依拠した注釈書として『一葉抄』以降の注釈書名がないので、当該本の成立は『細流抄』より前だろうと考えられるのだが、一方では、『雨夜談抄』と『源氏和秘抄』の内容も引用されていることが明確になった。第四節では、「桐壺」巻と「帚木」巻の注釈の内容についてまとめ、最後に第五節では、当該本でしばしば反復される注釈について考察した。これらを分類してみると①「〜とよむへし」、②「聞えたるまゝ也」、③「心明か也」の三種類がある。一方で、多数の和歌に関する注釈は「聞えたるまゝ也」や「明か也」などとしか示されていない。これらの事情から考えてみると、『源氏物語抄』は一般的な『源氏物語』古注釈と違って、何らかの特別な目的のために作成されたものと考えられる。

第九章 九曜文庫本『源氏物語抄』と中世の『源氏物語』古注釈

——『水原抄』と『雨夜談抄』を中心に——

第九章では九曜文庫本『源氏物語抄』と中世の『源氏物語』古注釈、特に『水原抄』と『雨夜談抄』との関係を中心に考察した。

まず、第二節では、古注釈の引用した『水原抄』の逸文は時代と共に、減少していくものであることを指摘する。実隆の時代に『水原抄』はもう散逸したと推定できよう。そのため、江戸時代に書写された『源氏物語抄』には、『水原抄』を引用したと指摘があっても、書名のある注釈内容が三項目しかない。さらに、いずれも『花鳥余情』から引用したものである。当該本の編者は実際に『水原抄』を参考にしたとは考えにくいのである。但し、当該本の「帚木」巻に他の古注釈にみえない「河内守」のある項目があることから、

第三節では、この点について検討し、『源氏物語抄』の編者の誤りの可能性について考えた。この問題は簡単に解決しえないが、いずれにせよ、当該本は『水原抄』との関係が薄いと考えられる。

第四節と第五節では当該本の「帚木」巻を詳細に考察し、『雨夜談抄』の注釈が多く引用されていることを確認した。『源氏物語抄』の注釈はほとんど短めなものが多いが、『雨夜談抄』の注釈は長文が多いため、編者は『雨夜談抄』の説をまとめたり、いくつかの短い項目にわけたりする場合もある。さらに、他の注釈書の内容を同じ項目に記す場合もある。それゆえ、編者は、ある程度以上の『源氏物語』に関する知識を持っている人物ではないかと推定した。

*

このように、本論文では中世における『源氏物語』古注釈のさまざまな面について考察し、先行研究の不十分なところを中心に検討した。これからの『源氏物語』古注釈の研究では、本論文で扱った資料がより注目されるようになることを期待する。